郡山市地方卸売市場における水産物の流通と移入先

篠原　秀一

Ⅰ　はじめに

郡山市は，福島県のほぼ中央に位置し，約30万の人口(1987年)を擁する。郡山市の市制は1924年に施行された。その位置と交通の要衝にあることから，郡山市は福島市，いわき市と並ぶ県内の卸売業中心地になっている。

郡山市における水産物流通に関しては，田中(1957)[1]と石井(1973)[2]が検討している。田中は，鉄道開通前の日本における海岸から内陸への塩と水産物の移入路を，聞きとり調査によって明らかにした。これによると，1930年から1935年頃までにおける郡山市は，現在のいわき市平方面からの生鮮魚の通年的な移出限界地であり，冬季における会津方面への生鮮魚移出の中継地であった。ただし，田中は，郡山市へ移入された水産物の産地がどこであったかを明らかにしていない。石井は，流通機構の実態調査をもとに，郡山市を中心とする地域の水産物流通の諸問題を論じた。これによれば，1972年頃の郡山市における水産物流通の概容を，卸売段階から小売段階まで知ることができる。石井は，水産物の安定供給と消費者の水産物に関する学習が，水産物流通にとって重要であることを指摘し，郡山市広域圏中央卸売市場の設置に関する私案まで述べている。

本稿は，内陸地における食用水産物の移入の1事例として，郡山市地方卸売市場における水産物の移入を分析する。まず，郡山市における水産物流通の歴史を概述し，郡山市地方卸売市場の成立と機能を明らかにする。次に，1987年度における郡山市地方卸売市場による水産物の魚種別移入先を，日本における水産物の魚種別主要産地と比較検討する。これにより，郡山市地方卸売市場における水産物移入を，全国的な水産物需給関係の中に位置づける。本稿は主として，文献資料と聞きとり調査にもとづく[3]。

Ⅱ　郡山市における水産物流通

Ⅱ－1　郡山市地方卸売市場開設までの水産物流通

郡山市に初めて魚問屋が設立されたのは，「郡山市史第4巻」[4]によると，1871年のことである。この魚問屋が後に魚市場となった。当時は輸送機関が十分に整備されていなかったため，郡山を含む安積郡内の河川と湖沼で獲れた淡水魚が主に魚市場へ移入された。

「郡山市史第9巻」[5]によれば，1908年には，郡山において1,561トンの水産物移入，1,304トンの水産物移出があった。移入量1,561トンのうち，84％強が塩干魚で，残りが生鮮魚である。塩干魚は，函館から1,016トン，八戸から303トンが移入されていた。生鮮魚は，原釜(現在の相馬市)から139トン，水戸から103トンが移入された。塩干魚の移入先は，生鮮魚の移入先より郡山から遠隔にあったが，函館が最遠の地であった。移出量1,304トンのうち，塩干魚は80％を占め，残りが生鮮魚である。塩干魚の移出先は，若松，三春，小野新町，白河，須賀川，本宮であった。生鮮魚の移出先は，須賀川，三春，若松で，塩干魚の移出先よりその範囲が狭い。

1926年には，「郡山市統計一班」[6]によると，郡山市において3,794トンの水産物移入，1,113トンの水産物移出があった。1908年に比べて，移入量が2.4倍以上に増加した。移入量に占める生鮮魚の割合は，1921年に27％，1922年に32％，1923年に48％と増加した。1926年には塩干魚1,951トン，生鮮魚1,843トンが移入され，移入量に占める生鮮魚の割合は49％となった。

第２次世界大戦後の1946年，郡山駅西口前に水産物卸売業者の店舗が集まり，魚市場が自然発生的に作られた。1954年における郡山市および三春町と本宮町への水産物移入量は，推定6,675トンであった[7]。推定移入量の45％を扱う郡山市代表卸売人の事例をみると，移入量の70％を生鮮魚が占めていた。生鮮魚移入量の主要移入先別比率は，青森県が44％，宮城県が19％，北海道が13％，福島県が６％，栃木県が４％，新潟県が３％，静岡県が３％であった。栃木県からの移入分は，東京都や神奈川県等から栃木県へ転送された水産物である。郡山市の1954年における生鮮魚移入先は，1908年における塩干魚移入先より遠隔化した。

Ⅱ－２　郡山市地方卸売市場における水産物流通

1946年以来，郡山駅前にあった魚市場と青果市場は，市街地が発展するにつれ，駅前の交通渋滞，騒音，悪臭等の原因となっていた。この郡山駅前の環境を改善し，生鮮食品の卸売市場を整備するため，駅前の魚市場と青果市場を移転統合した公設市場が開設されることになった。その郡山市公設の消費地卸売市場が，郡山市地方卸売市場である。

郡山市地方卸売市場は，1970年４月，市内富久山町久保田に郡山市中央市場として開場した。現在の名称になったのは，卸売市場法施行後の1972年９月である。水産物部と青果物部に分かれ，水産物売場の面積は4,471.2m^{2}である。郡山市地方卸売市場全体の敷地は８万3102m^{2}で，駐車場面積がそのうちの26％を占める。郡山市地方卸売市場の水産物取扱高は，1970年度に1.15万トン，35億円，1975年度に2.95万トン，124億円，1980年度に3.23万トン，177億円を記録した。この取扱高は，数量が1982年度以降，金額が1983年度以降，停滞している。1987年度の郡山市地方卸売市場における水産物取扱高は，3.21万トン，208億円であった。

郡山市地方卸売市場が扱う水産物は，生鮮魚，塩干魚，冷凍魚，加工品の４種類に分けられる。加工品には，佃煮等の味付水産加工品の他，水産缶詰も含まれる。取扱量の種類比率は，1981年度に生鮮魚33％，塩干魚25％，冷凍魚20％，加工品22％，1984年度に生鮮魚37％，塩干魚28％，冷凍魚17％，加工品18％，1987年度に生鮮魚35％，塩干魚24％，冷凍魚9％，加工品32％であった[8]。1987年度の取扱量は，冷凍魚が1986年度の61％に減少したのに対し，加工品が1986年度の２倍に増加した[8]。

1988年現在，郡山市地方卸売市場水産物部は，開設者を郡山市とし，卸売人２社，仲卸人10社，買受人440名によって運営されている[9]。卸売人が全国各地から集荷した水産物は，仲卸人と買受人に販売される。その販売方法は，原則としてセリ売り，一部，相対売りである[10]。仲卸人は卸売人から購入した水産物を小口に調整し，相対売りで買受人に販売する。買受人は，開設者の承認を得た小売人で，卸売人と仲卸人の双方から水産物を購入できる。市場内の水産物の売買は伝票によって行なわれ，現金が直接用いられることはない。

市場内には，卸売業務を円滑に進める補助機関がある。郡山市卸売市場精算株式会社は，伝票売買に伴う代金の精算を担当する。買受人は，この精算会社に購入代金を５日後以内に支払わなければならない。販売者には，その代金がこの精算会社から即日支払われる。郡山市地方卸売市場組合は，市場の維持補修，駐車場の整備を行なう。郡山市地方卸売市場管理事務所は，郡山市商工労政部による市場監督機関である。水産物部の買受人組合が，郡山海産物商業協同組合，青果物部の買受人組合が福島県中央青果商業協同組合である。以上のほか，加工食品販売，包装資材販売，給油

所，食堂，製氷所等の付属店舗が16軒，卸売人関連会社が２社，バナナ醗酵所が１社，銀行が１店ある。郡山市地方卸売市場の休場日は日曜日と祝祭日である。

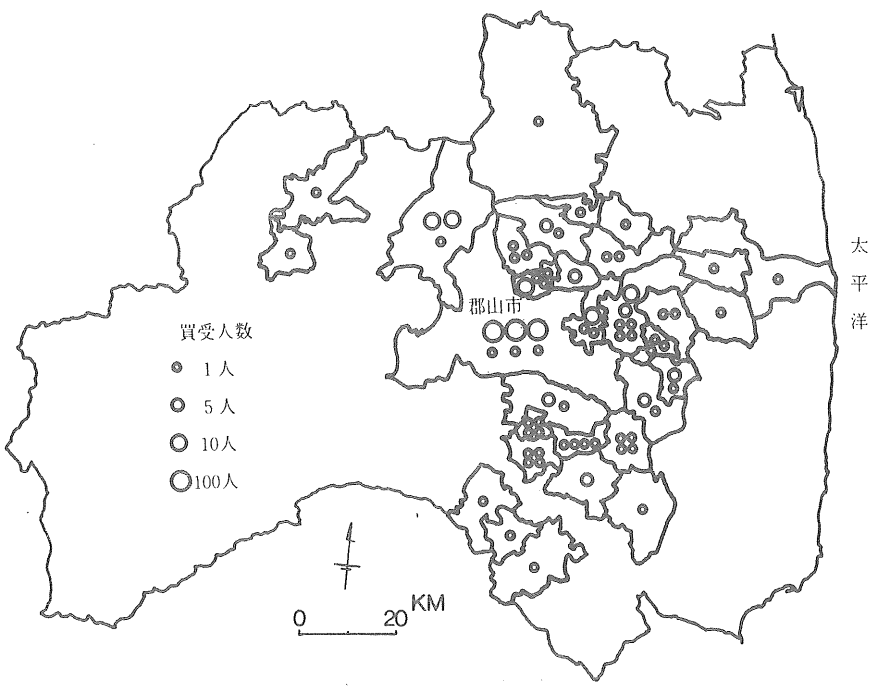
第１図は，1988年における郡山市地方卸売市場の水産物買受人の市町村別分布を示したものである。郡山市の303人を最多とし，猪苗代町に21人，船引町に19人，本宮町に13人，三春町に12人が分布する。郡山市とその隣接する市町村に居住する買受人が，全体の89％を占める。買受人の居住地は，水産物の移出先を意味する。買受人による水産物移出に加え，郡山市地方卸売市場からは会津若松市，福島市，山形市，白河市，いわき市の消費地卸売市場へ水産物が転送される。その転送量は，全取扱量の約15％である。1988年における郡山市地方卸売市場の水産物移出先は郡山市とその隣接地域を中心とするが，1908年における郡山からの水産物移出先より遠隔地に及ぶ。水産物の長距離輸送には，保冷または冷凍設備のあるトラックが使用される。

郡山市地方卸売市場の1987年度における水産物取扱金額は，郡山市全体の約8割を占めた。残り2割が，郡山市地方卸売市場を経由しない場外流通水産物の取扱金額である[11)]。1987年度の郡山市地方卸売市場の水産物取扱高は，福島県内の消費地卸売市場の中で数量，金額ともにいわき市中央卸売市場に次いで第２位で，福島市中央卸売市場より大規模である[12)]。

Ⅲ　郡山市地方卸売市場における水産物移入先

Ⅲ－１　魚種別移入先

第１表は，1987年度における郡山市地方卸売市場卸売人Ｋ社の水産物移入先を，主な生鮮魚と冷凍魚について示している。Ｋ社の水産物取扱高は，数量，金額ともに，1987年度における市場全体の取扱高の77.5％を占めた[13)]。以下，各魚種の日本における主要産地（第２表）と対照し，魚種別移入先を検討する。



第１図　郡山市地方卸売市場水産物買受人の市町村別分布
（1988年４月１日現在）
（郡山市役所商工労政部商工振興課資料から作成）

第１表　郡山市地方卸売市場の水産物卸売人Ｋ社による魚種別取扱量の移入先別比率(％)と平均単価(円/kg)，および市場全体の魚種別推定取扱量(トン)(1987年度)

移入先＼魚種	イワシ類	サバ類	イカ類*	サンマ	カツオ	アジ類	イカ類	カツオ*	マグロ類	マグロ類*
北海道				10			20			
青森県		20	100							
岩手県	10	5		40						
宮城県		5		15	25				8	
福島県		5		20	15					
秋田県							5			
山形県							10			
新潟県							20			
石川県						5	5			
千葉県	20	10		15	15	10				
神奈川県	20				2					
静岡県		50			8			100	2	100
愛知県	50									
三重県					20	20				
和歌山県						5				
高知県					9					
宮崎県					6					
大分県						10				
福岡県						40	30			
長崎県						5	10			
沖縄県									10	
その他国内		5				5				
国外									80	
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
平均魚価	169	177	430	472	512	603	686	969	1344	2773
推定取扱量	500	250	160	400	1800	170	800	50	1300	300

魚種の無印は生鮮魚，＊印は冷凍魚であることを示す。
サンマには生鮮サンマに加えて解凍サンマが含まれている。
冷凍カツオには刺身加工されたものが含まれている。
生鮮マグロ類，冷凍マグロ類にはそれぞれ生鮮カジキ類，冷凍カジキ類が含まれている。
冷凍イカ類，生鮮イカ類，生鮮マグロ類，冷凍マグロ類の平均単価は，それぞれ冷凍スルメイカ，生鮮スルメイカ，生鮮メバチマグロ，冷凍メバチマグロ脂身の価格で代表させた。

（聞きとり調査により作成）

a．イワシ類[14)]

イワシ類の移入量は，愛知県蒲郡市からが50％，神奈川県横須賀市からが20％，千葉県銚子市と船橋市および岩手県釜石市からがそれぞれ10％を占めた。以上の移入先の中で，銚子市だけが，全国的なイワシ類の主要産地[15)]である。蒲郡市，横須賀市，銚子市，船橋市，釜石市からのイワシ類は，それぞれ，三河湾，三浦半島沿岸，銚子沖，東京湾，釜石湾で漁獲されたものである。

日本におけるイワシ類の主要産地は，道東，三陸，常総，山陰の各地方に所在する。蒲郡市，横須賀市，船橋市は，主要産地の所在する地方から外れ，いわき市小名浜，北茨城市大津[16)]，波崎町，銚子市といった大産地より郡山市から遠くに位置する。釜石市も，石巻市，女川町と比較すると，イワシ類取扱量が少なく[17)]，郡山市からの距離が遠い。イワシ類の移入先は，主要産地とほとんど無関係であり，必ずしも近くの産地が選ばれていない。

b．サバ類[18)]

サバ類の移入量は，静岡県焼津市小川からが45％，青森県八戸市からが20％，千葉県銚子市からが10％，静岡県伊東市と福島県いわき市小名浜，宮城県石巻市，岩手県釜石市からがそれぞれ５％を占めた。以上の移入先のうち，全国的なサバ類の主要産地は，焼津市小川，八戸市，銚子市，石

第２表　日本における魚種別主要産地(上段)とその取扱量(下段，100トン)(1987年)

順位＼魚種	イワシ類	サバ類	イカ類*	サンマ	カツオ類	アジ類	イカ類	カツオ*	マグロ類	マグロ類*
1	釧路 8463	銚子 1637	八戸 2031	根室 409	勝浦 151	松浦 297	長崎 202	焼津 1471	気仙沼 147	清水 888
2	境港 4461	博多 448	函館 475	銚子 287	気仙沼 144	唐津 247	下関 185	枕崎 185	塩竈 130	焼津 812
3	八戸 3238	八戸 427	小木 193	女川 269	銚子 79	枕崎 229	博多 143	清水 129	那智勝浦 115	三崎 411
4	銚子 3185	石巻 313	塩竈 137	厚岸 206	沼津 60	博多 227	小名浜 102	山川 71	焼津 78	気仙沼 53
5	波崎 2584	松浦 297	気仙沼 119	気仙沼 202	中之作 60	境港 197	境港 100	女川 39	那覇 72	那智勝浦 50
6	石巻 2264	波崎 283	釧路 50	小名浜 200	那珂湊 57	阿久根 150	浜田 71	気仙沼 26	銚子 69	目井津 39
7	厚岸 1827	唐津 271	境港 48	大船渡 118	石巻 56	長崎 118	釧路 71	塩竈 14	鹿児島 60	塩竈 37
8	久慈 1402	女川 263	釜石 44	石巻 92	塩竈 48	浜田 109	金沢 45	石巻 10	石巻 46	石巻 21
9	広尾 1400	境港 242	石巻 32	宮古 86	枕崎 43	串木野 83	根室 35	八戸 9	沼津 35	女川 15
10	女川 1386	焼津 216	大畑 26	中之作 72	焼津 30	牛深 53	佐世保 35	釜石 1	清水 34	八戸 14

魚種の無印は生鮮魚，＊印は冷凍魚であることを示す。
取扱量は産地魚市場における水揚量と陸上搬入量の和で，輸入量は含まれない。
目井津の数値は1986年12月から1987年11月までの合計値である。
(「昭和62年水産物流通統計年報」「昭和62年度版福島県海面漁業漁獲高統計」および聞きとり調査から作成)

巻市である。

日本近海におけるサバ類の好漁場は，三陸沖，銚子沖，伊豆諸島近海，九州の西方沖と北方沖，山陰沖に存在する。日本におけるサバ類の主要産地または大産地は，この好漁場に近隣する三陸，常総，東海，西九州[19]と北九州，山陰の各地方に所在する。サバ類の移入先は，必ずしも主要産地ではないが，いずれも主要産地が所在する地方にある[20]。ただし，各産地からの移入量は，各産地のサバ類取扱量の規模とは比例せず，各産地と郡山市との距離にも無関係である。

c．サンマ

サンマは，東日本において８月から12月にかけて大量に水揚げされる。この水揚げの季節性のため，移入されるサンマには生鮮サンマに加えて，一度冷凍したサンマを解凍したもの(解凍サンマ)も含まれる。

サンマの移入量は，北海道の根室市と厚岸町からが10％，岩手県と宮古市と釜石市からが40％，宮城県の気仙沼市と女川町，石巻市からが15％，福島県いわき市の小名浜と中之作からが20％，千葉県銚子市からが15％を占めた。以上の移入先は，いずれもサンマの全国的な大産地である[21]。産地別移入量をみると，郡山市よりも北の産地からの移入が65％を占めた。これは，より北方で漁獲され水揚げされたサンマの方が，脂肪が多く，食用に向くからである。岩手県からの移入が宮城県からより多いのも，理由は同じである。

d．カツオ

日本における都市１所帯平均では，1987年におけるカツオの年間消費量は1140グラムであった。この消費量は，イカ類の19％，マグロ類の33％，イワシ類の45％，アジ類の46％で，サンマ類より少ない[22]。郡山市民は三陸沖で獲れる多脂肪のカツオを好んで食べ，カツオの消費量が全国平均より多いと言われる[23]。郡山市地方卸売市場では，カツオの推定移入量がイワシ類，サバ類，サンマ，アジ類，イカ類，マグロ類よりも多い(第１表)。郡山市では，他魚種に対するカツオの相対的な消費量が少なくとも全国平均より多い。

生鮮カツオの移入先は，北は宮城県から南は宮崎県に及ぶ。生鮮カツオの移入量は，宮城県気仙沼市からが20％，尾鷲市等の三重県からが20％，福島県いわき市の小名浜と中之作からが15％，千葉県の勝浦市と銚子市からが15％，高知県からが９％，静岡県の沼津市と清水市，焼津市からが８％，南郷町等の宮崎県から６％，宮城県の女川町と石巻市，塩竈市からが５％，神奈川県横須賀市からが２％を占めた。いずれの移入先も，近海カツオ一本釣漁船あるいはカツオ・マグロ旋網漁船の根拠地または水揚地である。

日本における生鮮カツオの主要産地は，南三陸，常総，東海，南九州の各地方に所在する。郡山市への生鮮カツオの移入先は，南九州を除く主要産地の所在する地方に加えて，三重県，高知県，宮崎県の近海カツオ一本釣漁業根拠地に及ぶ。三重県と宮崎県からの生鮮カツオは，それぞれ，三重県魚連，南郷漁協と外浦漁協により直販されることが多い。

冷凍カツオは，静岡県焼津市からの移入が，100％を占めた。焼津市は，日本最大の冷凍カツオの水揚地である。

e．アジ類[24)]

アジ類の移入先は，イワシ類，サバ類，サンマ，カツオの移入先よりも西に偏っている。日本におけるアジ類の産地が西に偏在しているためである。アジ類は，千葉県銚子市から10％，石川県から５％，三重県から20％，和歌山県田辺市から５％，大分県佐伯市から10％，福岡市から40％，長崎市から５％，鳥取県境港市および兵庫県香住町から５％が移入された。以上の移入先のうち，福岡市と長崎市，境港市だけが，日本におけるアジ類の主要産地である[25)]。主要産地が所在する北九州と西九州および山陰の各地方以外からの移入が，40％に達した。佐伯市からのアジ類の移入には航空機が利用される。

f．イカ類

日本の西九州と北九州，山陰，北陸，東北，北海道の各地方には，イカ類の産地が点在する。生鮮イカ類の主要産地が日本海と東シナ海の沿岸に多いのに比べ，冷凍イカ類の主要産地は太平洋沿岸に多い。

冷凍イカ類の移入量は，八戸市からが100％を占めた。八戸市は，日本最大の冷凍イカ類の水揚地である。移入された冷凍イカ類は，60％がアルゼンチン沖合産，20％がニュージーランド沖合産，20％が日本海産である。

生鮮イカ類は，北海道岩内町から20％，秋田県から５％，山形県酒田市から10％，新潟県から20％，石川県から５％，福岡市から30％，長崎県壱岐から10％が移入された。壱岐からの移入には航空機が利用される。移入先は，日本における生鮮イカ類の主要産地と必ずしも一致しないが[26)]，いずれも日本海沿岸の産地である。

移入されたイカ類は，生鮮物が50％，冷凍物が10％で，残りの40％は加工物である。加工イカ類は八戸市から30％，岩手県山田町から30％，大槌町から５％，釜石市から５％，宮城県気仙沼市から10％，塩竈市から20％が移入された。加工イカ類の移入先は，いずれも三陸地方にあった。

g．マグロ類[27)]

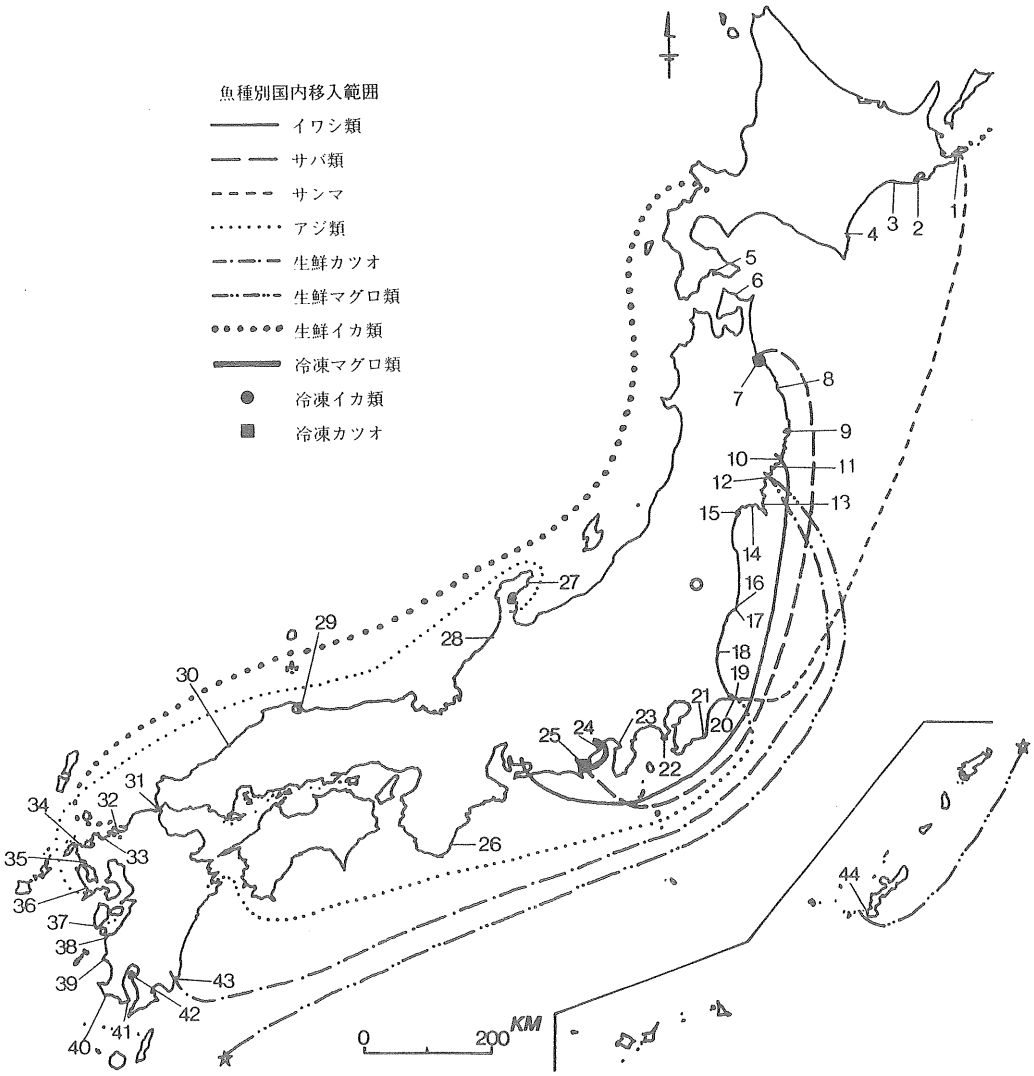
冷凍マグロ類の移入量は，静岡県清水市と焼津市からが合わせて100％を占めた[28)]。清水市と焼津市は，日本における冷凍マグロ類の大量水揚地である。

生鮮マグロ類は，宮城県気仙沼市と塩竈市から８％，静岡県焼津市から２％，沖縄県から10％，国外から80％が移入された。国外からの移入量のうち，カナダからが若干量で，フィリピン，インドネシア(バリ島)，グァム島からが12％，台湾からが85％以上を占めた。国内移入先は，いずれも生鮮マグロ類の主要産地である。沖縄県と国外からの移入には航空機が利用され，羽田空港と成田空港が中継地となる。

Ⅲ－２　水産物移入先の傾向

以上の魚種別移入先の分析から，1987年度の郡山市卸売市場における水産物移入先には，次のような傾向を指摘できる。

第１に，高単価の生鮮魚ほど，その移入先限界



第２図　郡山市地方卸売市場における水産物の魚種別国内移入範囲(1987年度)と
主要産地(1987年)の位置
数字は各産地の位置を示す。(聞きとり調査および第２表から作成)

1. 根室　2. 厚岸　3. 釧路　4. 広尾　5. 函館　6. 大畑　7. 八戸　8. 久慈　9. 宮古
10. 釜石　11. 大船渡　12. 気仙沼　13. 女川　14. 石巻　15. 塩竈　16. 中之作　17. 小名浜
18. 那珂湊　19. 波崎　20. 銚子　21. 勝浦(千葉県)　22. 三崎　23. 沼津　24. 清水　25. 焼津
26. 那智勝浦　27. 小木　28. 金沢　29. 境港　30. 浜田　31. 下関　32. 博多　33. 唐津
34. 松浦　35. 佐世保　36. 長崎　37. 牛深　38. 阿久根　39. 串木野　40. 枕崎　41. 山川
42. 鹿児島　43. 目井津　44. 那覇

は遠隔化する。(第2図)。羽田空港，成田空港は，空輸される高価な生鮮魚の移入中継地となる。

第2に，生鮮魚の移入先は複数あるが，主要産地あるいは大産地とは限らない。イワシ類の移入先には特にその傾向が著しい。逆に，冷凍魚の移入先は日本最大の産地であった。

第3に，3種以上の水産物移入先として，釜石市，気仙沼市，石巻市，いわき市，銚子市，焼津市は重要な移入先である。いずれも，大漁港を有する都市である。

石井(1973)[29]によれば，1967年における郡山市への水産物移入量は，産地卸売市場以外の消費地卸売市場からが5割を越えていた。移入水産物を生鮮魚に限っても，消費地卸売市場からの移入量が全体の1割以上であった。1987年における郡山市地方卸売市場での水産物移入は，産地卸売市場すなわち漁港からの直送が原則となっている。たとえば，築地の東京都中央卸売市場を経由した移入水産物は，1987年度には日本海産の高級魚に限られ，全移入量の1％程度にすぎなかった。

Ⅳ．むすび

以上，郡山市地方卸売市場における水産物の移入先について検討した。ここでは，今後の課題を示してむすびとする。

課題の第1は，卸売人の移入先業者との取引関係を把握すること。移入先が，業者の取引関係や系列によって決定されることもある[30]ので，注意する。

課題の第2は，生鮮魚移入先の季節性を分析すること。これにより，複数ある生鮮魚移入先のそれぞれの役割が明らかになると思われる。

課題の第3は，大手小売業者や宅配業者による水産物移入先を分析すること。場外流通を考慮しなくては，最早，水産物流通を総体的に把握できない[31]。

課題の第4は，水産物の輸送手段，輸送経路も考察すること。水産物流通の史的変化を研究する場合，これは不可欠の分析視点である。

課題の第5は，分析対象の地域と魚種を増やすこと。各地域の豊富な事例を比較することで，消費地における水産物流通の研究を進展させることができる。

本稿を作成するにあたり，郡山市地方卸売市場と郡山市役所商工労政部の方々に御世話になりました。また，筑波大学地球科学系の奥野隆史先生，斉藤功先生をはじめとする先生方から貴重な御助言をいただきました。以上，記して深く感謝いたします。

[注および参考文献]

1) 田中啓爾(1957)「塩および魚の移入路－鉄道開通前の内陸交通路－」古今書店．317頁．
2) 石井澄夫(1973)「水産物流通の諸問題－郡山市地域を中心として－」郡山市．81頁．
3) 移入先と移入量については，詳細な統計資料がなく，聞きとり調査によったため，正確には分析できない．しかし，移入先と移入量の概略的な傾向は指摘可能である。
4) 郡山市(1969)「郡山市史第4巻」郡山市．158．
5) 郡山市(1980)「郡山市史第9巻」郡山市．114－117．
6) 郡山市役所(1927)「郡山市統計－班昭和二年十一月」郡山市．72．
7) 福島県経済部水産課(1955)「福島の水産昭和29年版」福島経済部水産課．114－115．
8) 郡山市地方卸売市場管理事務所資料による。
9) 1988年5月現在，仲卸人から水産物を相対購入する「買出人」が490名存在する。「買出人」は，慣習的に無許可で市場入場が認められている。買出人は購買量が少量であり，卸売人から水産物を直接は

購入できない。

10) 水産物部のセリは，朝6時に開始される。

11) イトーヨーカ堂系列のスーパーマーケットＹ社により，場外流通が行われている。なお，この場外流通には，産地直送の宅配便による水産物取扱金額は含まれていない。

12) 1987年における水産物取扱高は，いわき市中央卸売市場が3万4639トン，237億69百万円，福島市中央卸売市場が2万1596トン，160億47百万円，会津若松市公設地方卸売市場が1万4774トン，107億49百万円であった。以上，郡山市商工労政部商工振興課の資料による。

13) 郡山市地方卸売市場管理事務所資料による。

14) ここでいうイワシ類は生鮮魚で，マイワシ，カタクチイワシ，ウルメイワシを含む。

15) ここでいう主要産地とは，魚類別に取扱量が全国で10位以内の産地を指するものとする。

16) 「昭和62年水産物流通統計年報」によると，1987年における大津漁港はイワシ類取扱量が12万4290トンで，女川漁港に次ぐ。

17) 「昭和62年水産物流通統計年報」によると，1987年における釜石漁港のイワシ類取扱量は，1540トンであった。

18) ここでいうサバ類は生鮮魚で，マサバ，ゴマサバを含む。

19) 「昭和62年水産物流通統計年報」によると，1987年におけるサバ類取扱量は，枕崎漁港が1万4821トンで全国第11位，長崎漁港が1万158トンで全国第13位であった。

20) 「昭和62年水産物流通統計年報」によると，1987年における伊東港のサバ類取扱量は,1万4569トンで全国第12位であった。伊東市は，枕崎市，長崎市と並ぶサバ類の大産地である．1987年における小名浜港，釜石漁港のサバ類取扱量は，それぞれ，7389トン，494トンであった。

21) 「昭和62年水産物流通統計年報」によると1987年における釜石漁港のサンマ取扱量は5781トンで，宮古港に次いで全国第11位であった。

22) 農家1所帯平均でも，カツオの年間消費量は，イカ類，サバ類，イワシ類，マグロ類，サンマ，アジ類より少ない。農林水産省統計情報部(1988)「昭和62年水産物流通統計年報」農林統計協会.422－423.

23) 郡山市地方卸売市場での聞きとりによる。

24) ここでいうアジ類は生鮮魚で，マアジとムロアジを含む。

25) 「昭和62年水産物流通統計年報」によると，銚子漁港，田辺漁港，佐伯港，香住漁港の1987年におけるアジ類取扱量は，それぞれ，1292トン，1646トン，150トン，125トンであった。

26) 「昭和62年水産物流通統計年報」によると，1987年における生鮮イカ類の取扱量は、岩内港が629トン，秋田港が1965トン，酒田港が2278トン，新潟港が2399トン，勝本港(長崎県壱岐)が2717トンであった。

27) ここでいうマグロ類には，カジキ類も含むものとする。

28) ただし，仙台市の冷蔵庫を経由して移入される量が多い。

29) 前掲2)，65.

30) 大手水産会社や商社による高級魚の供給には，この傾向がみられる。本稿で扱った冷凍マグロ類もその事例の1つであり，輸入されるエビ類，サケ，マス類なども同様な傾向を示す。

31) 田中豊治(1982)「水産物流通の地理学的研究」大明堂，103－104.
浜田英嗣(1988)：水産物流通の変貌．西日本漁業経済学会編「転機に立つ日本水産業」九州大学出版会，163－170.